平城宮朱用硯の実態

1　奈良時代の朱墨

古代の朱墨は、遺品、出土品ともに類例がない。そのため、赤色顔料を膠で固めた「朱墨」が製造されていたのか、どのような赤色顔料が使われていたのかなど、実態は良くわかっていなかった。とはいえ、古文書には朱筆、朱印が残されており、文書行政や写経事業において、朱墨が用いられたことは明らかで、平城宮や各地の官衙遺跡でも、固形の墨を磨った痕跡と赤色顔料が付着したものが一定量出土することから、固形の朱墨を磨って墨汁を作ったことは、もはや疑う余地がないといえる。

2　平城宮の朱用硯出土分布

平城宮から出土した陶硯については、『陶硯集成Ⅰ』[1)]で、2006年段階までの出土品をすべて報告済みであるが、これらは硯専用の器種として製作された定型硯である。これら定型硯のなかに朱墨に用いた痕跡が確認できるものはない。京および寺院でも、管見では平城京左京八条三坊十坪と興福寺旧境内から出土した圏足円面硯の硯裏面を用いた２例[2)]のみで、これらは陶硯を転用した一種の転用硯であるとも言える。

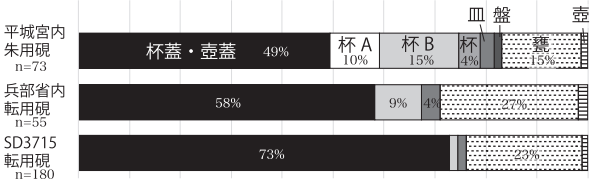

図94　朱用硯と墨用硯に用いられた須恵器の器種比率

平城宮出土の朱用硯は、いずれも食器や貯蔵具である須恵器を転用したもので、これまでの調査で73点が出土した（表８）。平城宮においても、定型硯をはるかに上回る数の転用硯が出土することは、すでに述べた[3)]通りだが、この朱用硯の点数は、墨用硯とは比較にならないほど少ない。平城宮内における朱用硯の出土分布（図95）をみると、東方官衙地区と式部省、兵部省の官衙地域からの出土が目立つ。

3　朱用硯の種類と使用部位

平城宮内出土朱用硯73点の器種別内訳は、杯蓋・壺蓋が約半数を占める（図94）。ついで、杯類が約30％、甕体部片が約15％と続く。これを兵部省内やSD3715の墨用

図95　平城宮出土朱用硯の出土分布

表８　平城宮内出土朱用硯一覧

No.	次数	出土遺構	器種	使用場所	使用痕	備考	No.	次数	出土遺構	器種	使用場所	使用痕	備考
1	18	秋篠川旧流路	甕	体部内面	◎		38	129	SD2700	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎	
2	20	包含層	杯Ａ	底部内面	◎		39	132	SD10085抜取	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎	
3	021東	SD2700	杯Ｂ	底部内面	◎		40	136	SD10325	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎	墨・朱兼用
4	021西	包含層	杯Ｂ蓋	頂部内面	△		41	139	SD2700	杯Ｂ蓋	頂部内面	○	墨書Ⅱ－0650
5	022南	SD3410	杯Ａ	口縁部内面	×		42	154	SD2700	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎	墨書Ⅱ－0830
6	29	SD3410	杯Ｂ	底部内面	◎	墨書Ⅰ－0502・0607	43	155	SD9481下層	甕	体部内面	○	
7	29	SD3410	杯Ｂ	底部内外面	◎	墨書Ⅰ－0623・0526	44	155	SD9481下層	杯Ｂ	底部内面	◎	
8	29	SD3410	杯Ｂ	底部内面	◎	墨書Ⅰ－0626	45	157	SD3765	杯Ｂ蓋	頂部内面	○	平城報告ⅩⅥ PL126-177
9	29	SD3410	杯Ｂ	底部内面	△	墨・朱兼用、図96-2	46	165	SD12084・12085	杯Ｂ	底部内面	○	
10	29	SD3410	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎	墨・朱兼用	47	165	包含層	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎	
11	29	SD3410	甕	体部内面	◎		48	165	包含層	皿C	底部内面	◎	
12	32	SD4951	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎		49	171	包含層	杯Ｂ蓋	頂部内面	○	墨・朱兼用ヵ
13	32	SD3410・4951	杯Ｂ蓋	頂部内面	○	墨痕あり	50	172	包含層	杯Ａ	底部内面	○	
14	32	SD1250	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎	墨・朱兼用、墨書あり	51	175	SD12985	杯	底部内面	×	
15	32	SD4951	杯Ｂ蓋	頂部内面	△	墨痕あり	52	205	包含層	杯Ｂ蓋	頂部内面	○	
16	32	SD3410	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎		53	206	SX13727	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎	墨・朱兼用
17	32	SD3905	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎		54	220	SA14567	甕	体部外面ヵ	○	
18	32	SD3905ヵ	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎		55	222	SD11620	杯Ｂ蓋	頂部内面	○	
19	32	SD3410・4951	杯Ｂ	底部内面	◎	墨・朱兼用	56	222	包含層	杯Ｂ	底部内面	×	
20	32	SD4951	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎		57	222	SE14690	甕	体部内面	△	58と同一個体
21	32	SD3410	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎		58	222	SE14690	甕	体部内面	○	57と同一個体
22	32	SD4951	杯Ｂ蓋	頂部内面	○	墨痕あり	59	222	SE14690	杯Ａ	底部外面	○	
23	32	SD4951	盤	底部内面	◎	墨・朱兼用	60	229	SD15115	杯Ｂ蓋	頂部内外面	○	
24	40	SK5406	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎		61	261	上層整地土	甕	体部内面	◎	
25	40	SK5406	杯Ｂ蓋	頂部内面	△		62	295	SB17870抜取穴	壺	底部外面	○	
26	40	SK5406	甕	体部内面	◎		63	319	包含層	杯Ｂ蓋	頂部内面	○	
27	41	SD3715	皿Ａ	底部内面	◎	墨書Ⅰ－0909、図96-3	64	337	SK18532	甕	体部内面	◎	
28	43	SD4951	杯	底部内面	◎		65	429	SK19190	杯B蓋	頂部内面	○	
29	43	包含層	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎	習書ヵ	66	438	包含層	杯	底部内面	×	
30	44	包含層	甕	体部内面	◎	墨痕あり	67	440	SK19190	杯Ａ	底部内面	×	灯火器に転用
31	44	SD5785	杯Ａ	底部内面	◎	墨・朱兼用	68	440	SK19190	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎	図96-1
32	91	SD8161	杯Ｂ	底部内面	◎		69	440	SK19190	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎	墨書あり
33	99	包含層	杯Ｂ	底部内面	◎		70	469	包含層	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎	
34	120	SA9320抜取穴	杯Ｂ蓋	頂部内面	○	墨・朱兼用	71	503	SB19590抜取穴	杯Ｂ蓋	口縁部内面	×	
35	122	SD1250	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎	墨の習書多数	72	595	包含層	杯Ｂ蓋	頂部内面	△	
36	122	包含層	杯Ｂ蓋	頂部内面	◎	墨書Ⅱ－0261	73	595	包含層	甕	体部内面	◎	
37	128	包含層	杯Ａ	底部内面	◎								

＊墨書Ⅰは奈文研1983『平城宮出土墨書土器集成Ⅰ』史料第70冊、墨書Ⅱは奈文研1988『平城宮出土墨書土器集成Ⅱ』史料第75冊

転用硯と比較すると、杯類の比率が高いことがわかる。

次に、使用部位について。蓋は墨同様、天地を逆にして内面を用いる（図96-1）が、杯類はいずれも底部内面を用いる（図96-2）。特に杯Ｂの場合、墨用では底部外面の高台内を用いる場合が多いが、朱用には、いずれも内面を使用している。器の大きさや器形にも、一定の傾向が指摘できる。すなわち、墨用が比較的大型の杯、蓋や浅い蓋なども用いているのに対し、朱用では口径10～15㎝程度の小型の杯類が多用され、蓋の場合はやや器高の高いものが目立つ。このような差異は、おそらく朱墨が少量の使用で、貴重品であったため、墨汁のこぼれにくさを重視した使用方法によるものと推測できよう。

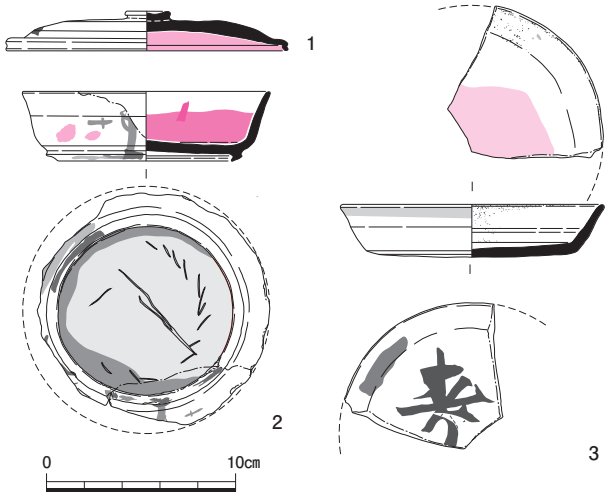

図96　平城宮内出土朱用硯（1：4）

4　まとめ

平城宮で朱墨が用いられる場面として、官人らによる文書行政の場を想定し、論を進めてきた。朱用硯には墨書や墨痕が付着するものが多い点（表８）も、これらが役人の机の上に並んでいたことを想起させる。朱墨兼用の痕跡が確認できるものも少なくない。図96-2は好例で、杯Ｂの底部外面を墨用、内面を朱用にしている。同じ硯面に墨と朱が残るものもある。先に墨を磨った後では、朱墨の色に影響があると思われるため、先に朱に使った後、墨用硯として用いたのであろう。

また、本稿では赤色顔料＝朱と述べたが、実際に73点の赤色顔料を見比べると、赤色顔料の色合いに差異があることがわかる。奈良時代の文書や工芸品には、複数の赤色顔料が用いられたことが、化学分析により明らかにされている[4]が、今後、これら顔料の化学分析をおこなうことで、より古代の朱墨の実像に迫ることができるであろう。

（神野　恵）

註

1）西口壽生編『平城宮陶硯集成Ⅰ－平城宮跡－』奈文研史料第77冊、2006。
2）神野恵編『平城京出土陶硯集成Ⅱ－平城京・寺院－』奈文研史料第80冊の47番と454番、2007。
3）神野恵「平城宮転用硯の実態」『奈文研紀要 2018』。
4）成瀬正和「正倉院の“朱印”と“朱筆”」『日本歴史』521、日本歴史学会編集、吉川弘文館、1991。